

審査の結果の要旨

氏名 天井 響子

本論の目的は、様々な問題状況下にあっても、他者に支援を求めない思春期前期の子ども（以下、非援助要請者とする）の心理的機序を審らかにし、そうした子どもに対する効果的な予防的支援方法の開発に資する実証的示唆を得ることである。

第1章では先行研究を概観し、思春期の精神疾患が未だに増加傾向にある要因の一つが、本人が自発的に相談したり助けを求めたりすること（以下、援助要請とする）を前提とする現在の支援のあり方が、非援助要請者を置き去りにしている点にあることを指摘した。また、非援助要請者の中には、問題を自覚していない者や援助要請しない選択をしている者も存在することから、本研究では、援助要請行動の促進を目的とした現在の支援方法とは異なる側面から非援助要請者の心理的健康の保持に寄与する方法を探ることとした。

第2章は非援助要請者に対する支援の現状把握を目的とし、研究1では教員に、研究2では中学生および若年成人の非援助要請者に、半構造化インタビューを行った。その結果、周囲からの環境調整等の間接的支援、並びに、心配、気遣い、承認等の情緒的支援が非援助要請者に対する有効な支援方法の一つとして機能し得る可能性が示唆された。

第3章では、効果的な援助要請の促進を目指すアプローチに関わるものとして、援助要請者が援助者に対して持つ期待（以下、情緒的援助期待とする）が援助要請行動の結果に与える影響を検討した。研究3ではまず、5因子（受容期待、再解釈期待、正当化期待、楽観視期待、気晴らし期待）からなる情緒的援助期待尺度を開発した。研究4では、その尺度を用いてデータを得、結果として、正当化期待が高い生徒は、受けた援助を否定的に、また再解釈期待が高い生徒は、受けた援助を肯定的に評価する傾向が明らかになった。

第4章では、援助要請行動の少なさを補填するアプローチとして、援助要請をしなくても適応的な個人が有する内的な保護要因の解明を試みた。研究5では中学生を、研究6では成人を対象に、コーピング行動（援助要請、積極的対処、回避）の組み合わせによるプロフィールを特定した。その結果、いずれの研究でも、悩みなし群、低援助要請/回避群、低援助要請/積極群、中援助要請/回避群、中援助要請/積極群、高援助要請/回避群、高援助要請/積極群の7クラスが特定された。最も適応的だったのは援助要請と積極的対処の両方を頻繁に使用した群であり、その双方が適応に有効であることが明らかになった。研究7では、中学生の非援助要請者の高適応群と低適応群で内的変数を比較し、対人信頼、未来展望、前向きさ、および周囲からのサポートの知覚が前者で有意に高いことが示された。

第5章では、一連の研究結果を総括し、それを基に、非援助要請者のタイプ別の介入のあり方、並びに、タイポロジーに依拠しない全人的アプローチとして、身近な大人による継続的な情緒的支援と間接的支援の提供が効果的である可能性が提示された。また、学校ベースの介入としては、ケースメソッド法を用いたストレスコーピングスキルへの介入、およびモデリングを活用した未来展望や前向きさへの介入の有効性が提案された。

本研究は、非援助要請者を対象とした研究が未だ黎明期にある中、その心理的機序に初めて確かな理論的枠組みと先端の方法論をもってアプローチし、単に援助要請を促すということ以外の支援方法の開発につながるであろう基礎的知見を提供したという点において価値があり、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。